

表現の裾野を広げる

齋藤美衣

されてきたのだと思う。

郡司和斗歌集『遠い感』は、飄々とした内容と共に、今後の短歌表現の文体への実験も見せてくれる。

水道代払わずにいて出る水を「ゆ、ゆうれい」と呟いて飲む

してみると切り絵がゆびにうつくしい動きをさせると知った八月

一首目。水道代を払っていないがまだ蛇口をひねれば出る水を幽霊のようだと思いがながら飲んでいる。散々うたわれてきた生活苦に持っていかず、ユーモラスに描く。「ゆ、ゆうれい」が面白く、効いている。二句の「払わずにいて」の「いて」がいい。短歌的にすっきりと作るなら「水道代払わないまま」だろう。前述の我妻の指摘する「誰かが発話したという事実の記録」がしっくりくる。

次の歌。初句の「してみると」に驚く。読者はまずいろんな想像をさせられる。そこから続く「切り絵」に意外性とインパクトがある。四句目が受身形になっている点もひねりがある。短歌らしく作ると、「切り絵する指

うつくしく動くなり」となるだろうか。内容が同じでも読み手が受ける印象はまるで違う。今年出版されたコスモス同人の歌集から文体上の面白さがある歌を二首挙げる。

百日が過ぎましたからさう言ひてはかなく落ちるくれなるの花

有川知津子『ボトルシップ』
かっこのない口語の「百日が過ぎましたから」がまず読み手を捉える。誰の言葉かと思いがら読んでいくと結句の「くれなるの花」にかかるのだとわかる。わかるけれどもそれが作者の言葉のようでもあり、読み手の声でもあるかのように不思議に響く。

とてもいい旅行かばんが欲しくなる「とてもいい」つてわからないけど

福士りか『大空のコントラバス』
初句の「とてもいい」がいい。「とてもいい」にはいろんな要素があつて、自分でもよくわからないという点にユーモアがある。繰り返される「とてもいい」が効果的だ。

歌を作るときその内容に加えてどんな言葉の内付けをし、肉声を持たせるのか試行錯誤したのちのものが文体であり、単純な口語・文語論争を超えた言語的実験だろう。自分新しい歌はわからないと決めつけず、果敢に表現の裾野を広げたい。

『起きれない朝のための短歌入門』（我妻俊樹、平岡直子）を興味深く読んだ。「はじめに」で平岡が「わたしにできるのは、自分の耳にかつて流し込まれたのと同じような『短歌についての会話』を読者に流しこむことだけだ」とあり、まさに短歌を作る／読むことについての肩肘はらないがスリリングな対話を楽しめる。この本の中で「口語と文語」について語られている。

「口語は誰かが発話したという事実の記録というか、録音された声に近い感じがするんだよね。対する文語は内面の記録、たとえば日記の文章を読むのに近い感じかな」

我妻のこの指摘が面白い。口語は一回性の場面装置の記録で、対する文語は時間的な興行きが表現されることなのかと思う。

口語短歌が等身大の日常を表現する手段として増えてきたのが一九九〇年代。口語文語ミックスに違和感がなくなってきたのが二〇〇〇年代。その後現在に至るまで文語をどのくらい抜いていくか、加えてミックスに頼らず口語での表現の幅を拡大していく実験がな